

## 死を覚悟した吉田所長ら原発所員を侮辱した朝日の偏向記事の軽さ

9月13日付朝日社説の問題点の一つは、もちろん、「所員の9割が命令に反して10%<sup>\*</sup>余り離れた別の原発に**一時退避**」(太字は引用者)という表現にある。朝日のこれまでの《誤報だった記事》の見出しはすべて、「別の原発に**一時退避**」ではなく、「**原発撤退**」であったはずである。「別の原発に**一時退避**」なら問題はなかった。これは単なる紙面の誤植なのであろうか。もし単なる「誤植」であるなら、どうして一番肝心要のところで「誤植」なのか、という根本的な疑問が募ってくる。もし「誤植」を通すなら、朝日の紙面全部がこうした「誤植」に貫かれているのではないか、と思わざるをえなくなるし、校正を含む紙面のチェック機能が崩壊していると考えざるをえなくなってくる。

「誤植」であろうと、「所員の9割が命令に反して10%<sup>\*</sup>余り離れた別の原発に**一時退避**」という冒頭部の表現に気づいた者は、以下の社説にどのようなもってもらいたいことが書かれていようとも、信用することはできなくなるだろう。この「誤植」に意味を見出すことはたやすい。「別の原発に**一時退避**」の表現であったなら、こんな騒動にはなっていなかったであろうのに、という潜在意識に巣くっている執筆者の願望が紙面に思わず投影されることになり、その願望は校正スタッフにも共有されているために、見過ごすことになってしまったという解釈である。だがその解釈にしても、現実と願望の区別がつかないまま社説が書かれているのか、という厳しい批判を免れることはできない。些細なことのようにみえるが、神は細部に宿るというように、その些細に問題～事態の本質が伏在しているのである。つまり、些細をおろそかにする者はその些細に内包されている巨大な意味に報復される。「貧すれば鈍する」という諺は、いまの朝日にピッタリなような気がする。

もう一つは、《読者や関係者の方々にかさねて深くおわびします。》という常套句にある。《関係者の方々》とは誰のことか。社説執筆者からすれば、その《関係者の方々》の中には、当然「所員の9割が命令に反して10%<sup>\*</sup>余り離れた別の原発に**一時退避**」という表現にあるように、撤退したと朝日が断定した第1原発の9割の所員や、昨年7月に死去した吉田昌郎元所長も含まれているのであろう。《関係者の方々》の中に原発所員や吉田昌郎元所長も含まれているから、《関係者の方々にかさねて深くおわび》することによって、当の原発所員や吉田昌郎元所長にも《深くおわび》することになっているのだろう。だが言葉というものを、そのように利便的に扱って済まされるのだろうか。

680号に転載した門田隆将のコラム「朝日新聞は事実を曲げてまで日本人をおとしめたいのか」は、この疑問に触れてくるように思われるが、しかし、彼のコラムもまた私の提出している疑問を真正面から受けとめているとはみられない。吉田調書からは《職員の9割は吉田所長の命令に「従って、2Fに退避し、朝日の言う「命令に違反、した部分などまったく出てこない」と指摘し、《朝日の報道によって世界中のメディアが「日本人も現場から逃げている」「第二のセウォル号事件」と報じたのは事実だ。最後まで1Fに残った人を「フクシマ・フィフティーズ」と称して評価していた外国メディアも、今では、所長命令に違反して所員が逃げってしまった結果にすぎない、という評価に変わってしまった。》と批判しながら、《事実と異なる報道によって日本人をおとしめるという点において、先に撤回された慰安婦報道と図式がまったく同じではないか、と思う。なぜ朝日新聞は事実を曲げてまで、日本人をおとしめたいのか》という文脈に先の疑問が収められようとしているからだ。

私の考えでは、当の原発所員や吉田昌郎元所長は朝日社説のように《関係者の方々》の中に含まれてはならないし、門田のコラムのように《日本人をおとしめるという》文脈に収められてはならないのである。朝日社説の《深くおわび》は《関係者の方々》の中に見えないかたちで含まれている原発所員や吉田昌郎元所長に向かうものであってはならないし、またおとしめられた《日本人》の中におとしめられた当の原発所員や吉田昌郎元所長も見えないかたちで解消されてしまっただけではない。朝日によっておとしめられたのは、《関係者の方々》でもなければ《日本人》でもなく、当の原発所員や吉田昌郎元所長であるから、朝日の謝罪は誰よりもまず彼らにこそ向けられなくてはならないのだ。もしそうであったなら、《かさねて深くおわびします》の文言の《おわび》で済まされるはずがない。

いまにして思えば、自分の死期を覚っていたであろう吉田所長が「吉田調書」の中でくどいほど、「撤退」ではなく「一時退避」と繰り返していたのは、自分の死後にこの退避問題が誤解されて部下

の所員たちが戸惑う目に遭うことを予見していたからであろう。にもかかわらず、「吉田調書」を入手した朝日は吉田所長が「一時退避」と繰り返している言葉を見過ごしたというより、読みとろうと、聞きとろうとしなかったのである。これが冒瀆でなくてなんであろう。当然ながら、吉田所長が現存していたなら、朝日が報道した時点で身を挺して朝日の記事に反論し、即座に撤回させていただこうと思われる。少なくとも今回のような「吉田調書」問題は起こらなかつたらう。その意味で朝日にとっては吉田所長が現存しているほうが幸いであつたと考えられるが、吉田所長が現存していたなら、朝日は報道していなかったかもしれないようにも思えてくる。もしかすると、報道前に吉田所長に確認することがあつたかもしれないからだ。

吉田所長が死去していて反論もなにもできないことが朝日の報道の勢いに弾みをつけたと推量すると、そのことが結果的に朝日に致命的な打撃を与えたことになる。吉田所長が生きていたなら、と思わず眩きそうになるのは、彼が「吉田調書」を遺書として残すことによって、今回の朝日のような非道記事を掲載することに対する反論を用意しているとはいえ、原発所員に対するような生者のみならず、故吉田所長に対するような死者に対する侮辱については、“死人に口なし、状態であるのを痛感するからである。

朝日は単なる記事偽装や虚報を原発所員や吉田昌郎元所長に対して行った点で、侮辱であるだけでなく、彼らが命を覚悟して現場を死守したことに対する敬意を一片も表すことがないどころか、命からがら逃げだしたかのような報道を行った点でも、許されない侮辱なのである。彼らは原発事故現場で命のやりとりを行っていたのであり、メディアは遠く離れた場所で取材し、記事を書き、報道していたのである。

記者諸君が現場の危険な実態を読者に知らせるために、現場に踏み込んで命をかけた取材をし、記事を書き、要するに、命を覚悟して現場を死守している原発所員たちと危険を共有していたのなら、遠くにいる私たちにはどんな言葉もないが、しかし、記者たちが安全な場所から危険な現場で戦っている原発所員たちの奮闘に対して、敬意を表しながら正確な記事を書くのならともかく、入手した「吉田調書」を文献のように目で追っていくだけで、しかも偏向に満ちた読解に基づいて錯誤の記事を書き、報道したのであれば、錯誤の記事を書いたことの謝罪を最下限として、自分たちの記事は原発所員たちの必死の奮闘に及びえない軽さであつたことの謝罪も不可欠となってくるであろう。なにしろ原発所員たちの奮闘は間違っていれば死につながり、訂正はきかないのに対して、記事のほうは何度でもおわびして訂正すれば、なに食わぬ顔で通用するからである。

故吉田所長に対しても、原発所員たちに対しても、本当に彼らに届くような謝罪をしないかぎり、《関係者の方々》へのおわびというような形式的な文言で済ませようとするかぎり、よくみられるように、朝日は謝罪をした振りだけで、謝罪を行ったことにはならないだろう。朝日がそのような謝罪から遠くにいるのは、9.11の朝日の木村社長が記者会見で、「読者の信頼傷つけた」と語っているところにもみられる。「読者の信頼傷つけた」ことは間違いがないだろう。しかし、その前に繰り返すが、故吉田所長や原発所員たちを深く「傷つけた」のである。そのことを語らねばならないのではなかつたか。

2006年に朝日が創刊127年を機にテレビCMなどで大々的に展開したキャンペーンコピーに、〈言葉は感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは信じている、言葉のチカラを。ジャーナリスト宣言〉というのがあつたのを思い起こしているが、いまの朝日（だけではないが）に最も欠損しているのは、その〈言葉のチカラ〉であり、どうすれば、どこから〈言葉のチカラ〉が湧き起こってくるのか、について真剣に考えることが問われているのだ。

さらにもう一点、その木村社長の記者会見で、目についたのでいっておくと、「信頼回復のために今何が必要なのか、ゼロから再スタートを切る決意」と語っていることの駄目さである。もちろん、「ゼロからの再スタート」ではなく、「マイナスからの再スタート」でなければならぬはずだ。「ゼロ」地点を深く突き抜けてしまっているという認識がないのである。「ゼロからの再スタート」などという恵まれた状況にはない、という透徹した認識を当然ながら、もちえないのだ。まだ自分たちがどんなに険しい崖に立たされているか、がよくわからないのであろう。社説にせよ、この会見にせよ、本社の中で盲目になるほどの居心地よさに浸ってきたにちがいないということが、こちらにはよく見えてくる。